

はじめに

1, 民族と宗教

民族の生き方は、その民族の宗教に依存している。例えば、「個人の存在」について考えると、キリスト教世界では、個人はそれぞれ神と単独で契約し、神と対峙している。神との対峙の仕方について、教会を媒介とするカトリック、個人が単独で挑むプロテスタント、国家と神が一体になっている東方正教などいろいろな信仰がある。

イスラム教では、個人は、神に仕える宗教の共同体ウンマの一員として戒律を守る生活を送り、独立した個人は存在しない。以上の宗教はいずれも一神教であり、最後の審判における救済を強く意識している点では同じである。

儒教世界では、個人は、血縁共同体に帰属し、先祖と子孫を繋ぐ縦の系列の一員に過ぎず、永久に祖先と子孫との関係の中で生きている。彼らは、同じ血縁に繋がる人の拡がりによって、宗族を形成して、生活を助け合うのである。

日本では個人はイエの担い手である。イエは生産の単位であって、個人は家禄、田畑、商標を受け継ぎ、子孫に伝える容器といえる。血縁関係が途切れた時には、養子を貰い、家を継がせるのである。日本の家の祖先を辿ると、天皇に集中する。

仏教世界では、個人は修行と瞑想によって煩惱や「病、老、死」の恐れを克服し、涅槃の世界に入り、絶対的な安寧の境地に入ることができる。その時には、個人の存在意識は消える。

ヒンズー教世界では、長い期間にわたって修行すると、自己の存在は、輪廻、転生、解脱という数百億年を周期とする宇宙の大循環の一部に過ぎず、また人生は一瞬だと悟り、その時、煩惱から解放されて、解脱の世界に入れる。インドの修行者の中には、老いた学者や政治家が混ざっており、食べ残しの食料で命を繋ぎながら、解脱を目指している。

2, 宗教と経済成長

神と個人の直接的な結びつきを信仰したキリスト教が近代社会を生み出した。18世紀から20世紀の中頃まで、欧米のキリスト教国が、経済力、軍事力ともに優れていた。欧米人は、非キリスト教の国民は素質が劣っているから、経済成長は無理だと思い込み、支配下に置き、キリスト教国と同じ思想に転換させ、経済力を向上させようと試みた。

ところが、20世紀の終わりから、IT技術が目覚ましい勢いで進歩して、技術情報の伝達速度が高まり、人や物や資金の移動がグローバル化し、膨大な量の原材料、部品、完成品が世界を駆け巡るようになった。

工場は高賃金国から低賃金国に移動し、現地の従業員は技術を覚え、所得が上昇した。経済の発展とともに、どの国でも、固有の文化、伝統、歴史が自覚され、国家のアイデン

ティティイーが強固になって、独自の価値体系に支えられた経済が続いている。

例えば、中国では漢の時代に入るBC 2世紀から、儒教による徳の統治が始まり、徳の体現者たる皇帝の独裁体制が連綿と続き、現在、共産党の独裁政権のもとで、世界2位の経済大国に発展した。ロシアは、スターリン体制が崩壊すると、まもなく、プーチンの東方正教型の政教一致の独裁体制に変わり、資源大国から製造業大国への発展を目指している。

イスラム教国は、イスラム教の戒律に忠実な経済成長を指向し、イランは、政策の基本は、最高宗教指導者の承認が必要であり、西欧的民主主義型による経済成長を目指してきたトルコでは、最近、大衆の要求によって、イスラムの戒律を尊重するようになった。

ヒンズー教のインドでは、カーストの種類は、2000～3000といわれ、1000年以上の昔から、全ての人が先祖代々の決まった職業を継ぐというという壮大なカルテル体制が形成されて、多様な分野で特殊な細かい技術が磨かれた。その基盤に乗って、現在、装飾品、自動二輪車、IT関連の情報サービス等産業が発展した。

将来のことは誰にも判らないが、長期的な経済を展望する時、固有の宗教や伝統に根ざして形成された倫理や経済システムに着目すると、大きなヒントが得られるはずだ。

私は過去60年間を銀行エコノミストとして、5年間を静岡県立大学の教員として生活している。銀行エコノミストであった頃、多数の国の現地調査を行い、幾つかの中進国や発展途上国の政策アドバイザーにもなった。その過程で得られた体験を大学の教員として整理するという恵まれた機会が与えられた。キリスト教、儒教、イスラム教を中心として、東方正教やヒンズー教の世界にも触れ、日本経済の将来を展望するという困難な問題に、私の人生最後の挑戦を試みた。